

在宅の限界点を高める⑬

# 特養入所者の地域への移行を实践

社会福祉法人長岡福祉協会高齢者総合ケアセンターこぶし園（新潟県長岡市）

社会福祉法人長岡福祉協会（田宮宗理事長）の高齢者総合ケアセンターこぶし園は、住み慣れた自宅で最期まで暮らすことができるように支援するため、複数のサービスの組み合わせを「サポートセンター」を長岡市内に展開している。特養入所者の地域への移行を進め、2014年3月に完了した。ICTを活用した情報共有・業務効率化にもいち早く取り組んでいる。数々の先駆的な実践を牽引してきた前総合施設長の小山剛さんが亡くなり、早や2年近く、後を引き継いだ現・総合施設長の吉井靖子さんに現在の取組状況を伺うとともに、3カ所のサポートセンター取材した。

## サポートセンターを市内各地に「特養の安心感」を地域展開

高齢者総合ケアセンターこぶし園（吉井靖子総合施設長）は、特養本体の入所者の地域への移行を進め、2014年3月に完了した。

開設から今日までの歩みを振り返ると、JR長岡駅から車で20分ほど離れた郊外の小高い一角に、定員100名の4人部屋

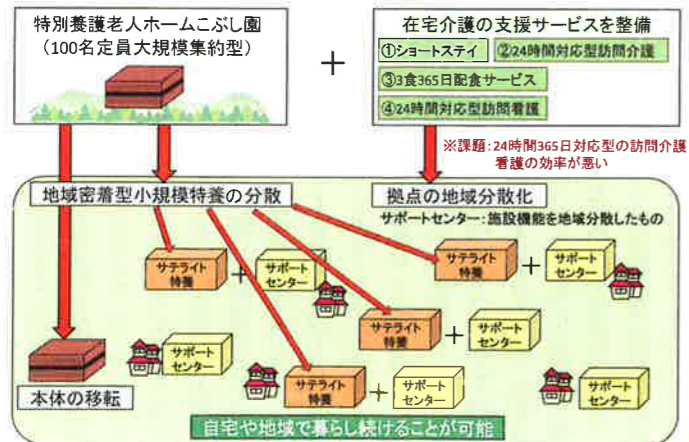
の特別養護老人ホームができたのが1982年。

1986年以降、地域のニーズを踏まえて、ショートステイの拡充、24時間対応の訪問介護や訪問看護、配食サービスなど在宅生活を支援するサービス開発に次々に着手した。しかし、郊外にある



吉井さん

高齢者総合ケアセンターこぶし園の概要



社会福祉法人長岡福祉協会  
高齢者総合ケアセンターこぶし園  
(本部)

〒940-2135  
長岡市深沢町2278番地8  
TEL 0258-46-6610  
FAX 0258-47-1243  
<http://www.kobushien.com/>

サポートセンター喜多町

〒940-2121 長岡市喜多町501-1  
 TEL 0258-20-5170 / FAX 0258-20-5172  
 ・特別養護老人ホームこぶし園 (定員60名)  
 ・短期入所生活介護 (定員7名)  
 ・カフェテラス  
 ・配食サービス (3食365日型)



SUPPORT CENTER  
KITAMACHI



生活相談員の竹原知宏さん。こぶし園に入職し11年目。「皆さん不安を抱えているので、話しやすい穏やかな雰囲気づくりを心がけています。今後また地域に出て行きますので、地域の人とのつながりづくりや、こぶし園の取り組みの啓発活動などを進めたいです」

コンセプトは「ホテル感覚」

サポートセンター喜多町のコンセプトは「ホテル感覚」だ。ホテルのフロントを思わせる受付①。卓上ベルを鳴らすと職員が出てくるといった趣向も。裏側には生活相談員の事務所と園長室がある。

受付の壁面には「Let It Be」という掲示がある。小山さんの遺族から何がしか寄贈したいという申し出があり、大のビートルズファンであった小山さんのことを考えた吉井さんの提案で作成したものだ。「これしかないと思いました」と吉井さん。ホール壁面には、愛用のギターも掛けられていた②。

ホールはカフェテラスにもなっていて、地域交流や介護教室などに活用している。カフェテラスは計6カ所のサポートセンターに設置されている。

ホールの一角にはバーカウンターも③。「地域の中高年男性も気軽に集えるように」という小山さんの配慮から設けられた。奥には、自身が集めた日本酒等が並ぶ。同様のバーカウンターが複数のサポートセンターにある。ユニット型特養(定員60名・6ユニット)の各居室には④、ミニキッチンも設置⑤。「居室に



ユニット。ちょうど昼食時であった



全体的にウッド調で落ち着いた雰囲気

施設を拠点とした24時間対応の訪問介護や訪問看護は効率が悪いため、2002年から複数のサポートセンターを組み合わせた「サポートセンター」を市内各所に分散して設置。「特養の安心感」を地域に広げていった。

その第1号が、02年1月開設の「サポートセンター三和」だ。当初は訪問介護・訪問看護・通所介護・居宅介護支援・グループホーム・バリアフリーアパート・配食サービスを提供(現在はサテライト型の小規模多機能型居宅介護とバリアフリーアパート)。「施設でなくても在宅でみられる」ことを具現化したものだった。その後も順次サポートセンターを展開した。06年からは、こぶし園本体の入所者の地域移行も進めた。入所者は各自が住んでいた地域にあるサポートセンターに移っていった。

定員15名の地域密着型特養(サテライト型)と小規模多機能型居宅介護などを組み合わせた「サポートセンター美沢」の開設(06年3月)を皮切りに、「千手」(09年6月)、「撰田屋」(10年7月)、「川崎」(12年5月)を展開。いずれもサテライト型特養(定員15〜20名)と小規模多機能等を有しており、近隣の地域も支援している。こうして定員100名のうち70名はサテライト型特養で移行を進めた。残った30名に定員30名を加えたユニット型特養を中心にした「サポートセンター喜多町」を2014年3月に開設。これで特養本体の移転が完了した。

現在、サポートセンターは旧長岡市内に計18カ所あり、いずれも「地域社会がひとつの施設」「道路が廊下、自宅が居室」としてサービスを行っている。このような24時間365日のケアや「サポートセンター構想」による地域生活の支援などは、2015年3月に亡くなった前総合施設長の小山剛さんが中心になり進めたものだ。現在、こぶし園の特養本体があった施設は「空っぽ」で、今後の活用を検討中だという。

西地区には、同サービスがまだないからだ。



よっては4人がけのテーブルがあり、ご家族と一緒に食事をとったりしています」と吉井さん。「特養はもはや収容の場ではなく、暮らしの場の選択肢の一つです」職員には「普通の暮らしを普通に支えるよう丁寧なケアに取り組みむように」と伝えている。地域に移送したことで家族の訪問が増え、滞在時間も長くなった。「地域の人は介護者も多く、自ずと職員を育ててくれます」と話す。全体として、「施設のようにしない」という考え方が貫かれている。吉井さんは今、定期巡回・随時対応サービスの併設を考えている。サポートセンター喜多町がある川

**サポートセンター川崎**  
 〒940-0864 長岡市川崎6-1286  
 TEL 0258-39-1008 / FAX 0258-39-1013  
 ・地域密着型介護老人福祉施設  
 (サテライト型特養、定員15名)  
 ・小規模多機能型居宅介護  
 ・地域交流スペース  
 ・配食サービス(3食365日型)  
 ・カフェテラス/キッズルーム  
 ・在宅支援型住宅  
 (バリアフリーアパート、10室)



**居心地は「最高」  
 地域に戻った利用者**

サポートセンター川崎は2012年5月に開設。2階建てで、1階にはサテライト型特養や小規模多機能型居宅介護、地域交流スペースなどが、2階にはバリアフリーアパートがある。サテライト型特養の利用者は皆、こぶし園本体から移って来たという。脳梗塞の後遺症がある利用者のKさん(82歳)が居室に招待してくれた(①)。現在の居心地を吉井さんが尋ねると、「最高です」と大きな声で答えた。自宅は「川崎」から5分ほど。30年来暮らしてきた地域だという。



地域交流スペースがあり、カフェテラス、カウンターバーとキッズルームも。キッズルームは4つのサポートセンターにある

「実際に現場で必要なものを作り上げてきました」

**医療との連携を強化  
 ICTも発展**

「施設に入らなくとも、施設に入ったときと同じようなサービスをつくることで住み慣れた地域で暮らしていくことができる」こと、そして特養の入所者を住み慣れた地域に帰すことを小山さんは目指していた。亡くなる前の最後の幹部会議では、「こぶし園でやってきた取組には間違いないから、このまま皆で協力して歩いていくように」と指示したという。

小山さんが考えていた目標は達成できたのだろうか。「介護サービスはしっかりと作ってくださったのですが、100%ではないと思います。引き続きだときに医療との連携が弱いと感じていました。そこを強化することで達成できると思っています」と吉井さんは話す。

その一つとして、2016年

「山(こぶし園本体)には1000人いたよね。それを皆、分散させたんだ」と説明し、地域への移行を紹介したテレビ番組を収録したDVDを見せてくれた(②)。番組では地域に戻ったKさんが古くからの友人から声をかけられたことも紹介。関係が回復したことが伺えた。

2階のバリアフリーアパートは、要介護高齢者や虚弱高齢者が利用。「川崎」は土地を借りて建

ており、バリアフリーアパートは地主が経営している。サービス付き高齢者向け住宅ではないので、生活支援の職員は常駐していないが、小規模多機能型居宅介護には職員の夜勤者がいるので、夜間なども安心だ。

併設されている小規模多機能型居宅介護



各部屋にウッドデッキに出られるドアがあり、外部からの訪問も可能だ。外側にはスロープもついている



バリアフリーアパート。エレベーターが小さいこともあり、緊急時に担架で運ぶことも想定した階段がある



宮本洋介さん(社会福祉士・介護福祉士)は入職して9年目。「ケースワーカー兼ケアワーカーとして働いています。慣れ親しんだ地域の方も多く、家族や親戚、友人が近くにいたりします。そうした方たちの訪問や、難しい場合もありますが外出などもしていただき、快適に過ごせるようお手伝いしています」



「状態が悪い認知症の人も病院や施設に入りっぱなしではなく、落ち着けば地域に戻っていただくようにしています」ただ認知症の人を抱える家族は往々にして大変な思いをしている。病院からダイレクトに自宅に退院するのではなく、自宅に近い地域のサポートセンターで受け止めた後に、支援の体制を整えて帰ってもらったりしている。また救急医療の現場も高齢化傾向にあるとの話なので、救急医療との連携も模索している。

こぶし園は、情報共有のICT化も先駆的に進めてきた。その実践も踏まえ、在宅で医療・介護の情報をタブレット端末な



Tさん夫妻

ケアハウスの施設長の神保美恵子さん（介護福祉士・主任介護支援専門員）。入職して29年目。施設・訪問・通所・地域包括支援センターなどを経験し、2015年4月に施設長に。「ここは住まいです。皆様ご自宅から移ってきているので、住んで良かったと思っただけのように心がけています」。看取りについても利用者に説明している



「地域包括ケアシステムの要素がほとんど凝縮されています。介護は全て。24時間の訪問介護と看護、デイサービス・認知症デイ、ケアプラン事業所、住まいとして部屋が広いケアハウスも。地域への配食も行っています。テナントとして内科・歯科などの診療所が入っており、「フィットネス」もあります。駅やショッピングセンターへのアクセスもよいです」と吉井さんは説明する。

### 地域包括ケアシステムの要素が凝縮

2005年8月に開設された「サポートセンターしなの」は5階建て。1階は、通所介護や訪問系サービスの事務所など、2階に長岡市高齢者センター、3～5階にケアハウスがある。

### サポートセンターしなの

〒940-0098 長岡市信濃2-6-18  
TEL 0258-31-7811  
FAX 0258-31-7813

- ・ケアハウス（個室30室、夫婦室5室）
- ・通所介護（一般／認知症）
- ・訪問介護（24時間365日型）
- ・定期巡回・随時対応サービス
- ・夜間対応型訪問介護
- ・訪問看護（サテライト、24時間365日型）
- ・居宅介護支援事業所
- ・配食サービス（3食365日型）
- ・健康増進・介護予防センター
- ・長岡市高齢者センター
- ・診療所



ダイルームから各自の居室に移動（上）  
Tさん夫妻の居室。夫婦室は約51～53㎡（左）

毎日企画。部屋に閉じこもりにならないように配慮している。「利用者のご希望により在宅サービス等を利用して、できれば看取りまで行いたいというのが園の方針です」と吉井さん。「ただ、認知症が悪化するとグループホーム等に移っていただくようなことも。住まいには、サ高住・特養などもあり、どういった住まい方をしたい



Yさん（左）とIさん

「フィットネス」とは、筑波大学大学院人間総合科学研究科の久野謙也教授が代表取締役社長を務める株式会社ウエルネスリサーチの協力を得て、中高年齢者を対象に、健康増進・介護予防に取り組んでいるもの（①）。同社は、健康増進・介護予防の啓発、運動プログラム



①

の提供・指導、データ解析などを行う。利用者は、体力テストや生活習慣などを踏まえ、個別メニューに基づき、運動を行う。ケアハウスの個室は約39～41㎡で、ゆったりとつくられている。夫婦室は約51～53㎡。キッチン・バスルーム・トイレ・収納・ベランダなどがある。トランプや手芸、絵手紙、茶話会など様々な催しを



情報共有のためのタブレット。利用者宅の訪問時に持参する



利用者宅に置かれている安否確認用のテレビ電話。オペレーターとの携帯電話につながる。テレビ電話は、この事業所では定期巡回・随時対応サービス及び夜間対応型訪問介護の利用者宅に計71台置かれている

定期巡回・随時対応サービス、訪問介護、夜間対応型訪問介護などの事務所。手前がサービス提供責任者の小川茂子さん（介護福祉士・社会福祉主事）。入職11年目。3交替でオペレーターも務める。タブレットを手放さず、コールがあれば速やかに調べて対応できるようにしている。利用者を中心にしたサービス提供を大切にしているという。後ろは右から太刀川順子さんと廣川結子さん。2人とも介護福祉士



のかで選んでいただければと思います」  
現在満室で、計40名が入居。半数が要介護認定を受けている。要支援者が多く、最も重いのはALSの人で要介護3。他の法人の通所・訪問系サービスの利用も多いという。  
ダイルームにいた4人の利用者に話を聞くことができた。  
新潟県中越沖地震を経験したTさん夫妻は、入居して8年目。市内の自宅に時々、手入れに戻るといふ。「入ってみてダメだったら（自宅に）戻ってこようと思っていたけど、居ついたんだよね」と、妻に話しかけたTさん（86歳）。妻（81歳）は「やっぱり安心感があります」ときっぱり。  
開設時に入居したYさん（女性、

77歳）も「宿直の人もいますしね」とうなずき、夜間も安心と強調。「私にはびつたりの場所。電動車いすを使っているのが狭いと動き回れないけど、お風呂の脱衣場・洗面所もお部屋も広い」と話す。介護サービスも利用しており、「安心」を繰り返した。  
歩行器を使い始めた入居6年目のIさん（男性、80歳）も「ここにいれば安心」だという。毎週訪問する息子と外出し、買物を楽しんでる。  
長岡市高齢者センターは、市のPFI事業を利用してつくられ、土地・建物は市が所有。有料で入浴施設や食堂、研修室や広間、和室などを利用でき、レクリエーション等が行われている。ケアハウスの入居者が利用することもある。



左側が通所介護、右側が認知症対応型通所介護



通所介護ではタオルを用いた体操をしていた。定員30名で、取材時は26名が参加



認知症対応型通所介護。定員10名。取材時はクリスマスの飾りを作っていた

## 長岡在宅フェニックスネット

長岡在宅フェニックスネットは、長岡市医師会や医療・介護の関係団体で構成される「長岡在宅フェニックスネットワーク協議会」が運営する。同協議会の会長は、市医師会の長尾政之助会長が務め、事務局も同医師会に置かれている。

フェニックスネットには、医療機関や介護サービス事業所など86機関が参加。情報共有に同意した患者数は約1,200人に上る。情報共有は、たとえば訪問看護で脈拍や血圧、体温などの情報を端末に入力すると、関係機関でその情報を共有できる。

2016年11月15日からは市の救急隊も加わり、市内全3消防署にタブレット端末を配置した。救急出動時には患者の病歴や薬歴、かかりつけ医や緊急連絡先を閲覧でき、より適切な対応が可能になった。受け入れ先の病院での迅速な治療などにも役立つ。

## ◆こぶし園の主な沿革

|         |                                                    |
|---------|----------------------------------------------------|
| 1982.04 | 特別養護老人ホームこぶし園開所（定員100名）                            |
| 86.10   | ショートステイ専用居室整備（定員12名）                               |
| 90.10   | ホームヘルプ事業                                           |
| 90.11   | ショートステイ専用棟<br>フレッシュ・インこぶし（定員50名）                   |
| 95.10   | 24時間365日型ホームヘルプ                                    |
| 96.12   | グループホーム千手（定員5名）                                    |
| 97.04   | 訪問看護ステーション事業                                       |
| 97.04   | 在宅複合型施設 アネックスこぶしショートステイ<br>専用施設レスビット・イン・こぶし（定員30名） |
| 99.04   | サテライト型デイサービス事業                                     |
| 2000.04 | 居宅介護支援事業                                           |
| 02.01   | サポートセンター三和                                         |
| 02.04   | サポートセンター上除<br>サポートセンター関原                           |
| 04.02   | サポートセンター永田                                         |
| 04.12   | サポートセンター千歳                                         |
| 05.08   | サポートセンターしなの（健康の駅ながおか）                              |
| 06.03   | サポートセンター美沢                                         |
| 06.12   | 小規模多機能型居宅介護美沢夜間対応型訪問介護事業                           |
| 08.07   | サポートセンター千秋（14.4～サポートセンター千秋）                        |
| 09.06   | サポートセンター千手                                         |
| 10.07   | サポートセンター摂田屋                                        |
| 12.05   | サポートセンター川崎<br>サポートセンター大島                           |
| 12.09   | サポートセンター平島                                         |
| 14.03   | サポートセンター喜多町                                        |

どで共有し連携を進める「長岡在宅フェニックスネット」が市内全域で2015年10月から運用されている。

「ヘルパーが始めたタブレットの活用が、長岡市全域に広がってきました」と吉井さん。今後、その活用がひろがり情報共有や連携が進むことに期待を寄せる。

こぶし園は2011年に経済産業省の研究事業で、タブレット端末を用いた訪問介護中心の情報共有に取り組み、業務の効率化等を確認した。

翌年には、その成果も踏まえ、こぶし園の訪問看護ステーションも経済産業省の研究事業を受け開始。加えて厚生労働省の在宅医療連携拠点事業を受託した。長岡市内の一部地域（川西地区）においてタブレット端末を用いた医療・看護・介護の業務効率化・情報共有を進めた。

その後、こぶし園の取組を踏まえた長岡市のモデル事業が行われ、さらに2015年10月からは長岡市医師会が地域医療介

護総合確保基金による事業として、市と協力して全市に広がっている。

また長岡市は、地域包括ケア推進協議会を2014年5月に設置。2名の副会長職のうち1名を生前の小山さんが務めていたが、それも吉井さんが引き継いでいる。

小山さんの強力なリーダーシップのもとで、組織をあげて進めてきた数々の試みが、長岡で発展してきている。

「小山園長の後を急ぎよ引き受けざるを得ませんでした。介護サービスのしつかりとつくってくださったので、それを安定的に運営していくこと、それから定期巡回・随時対応サービスや小規模多機能型居宅介護などの定額サービスを増やしていきたい。一方で、社会福祉法人であるこぶし園が少し弱い医療との関係を強化していくことが、看護師でもある私の役割だと思います。その後、次の人にバトナタッチしたいと思います」

（撮影／竹林尚哉）